

【特別支援学校用】

令和6年度学校評価 結果・学校関係者評価

様式1（特別支援学校）

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

学校名	佐賀県立うれしの特別支援学校
-----	----------------

1 前年度 評価結果の概要	・最終評価ではすべてA評価となったが、中間評価段階では「いじめの早期発見早期対応に向けた取組の充実」と「センター的機能の充実」「時間外勤務削減」の3点はB（おおむね達成できている）であった。R6年度も継続して取り組んでいく。
------------------	--

2 学校教育目標	キャリア教育を推進することにより、児童生徒一人一人が個性と能力を発揮し、心豊かにたくましく、積極的かつ主体的に社会に参加し、貢献する人間を育成する。
----------	--

3 本年度の重点目標	(1) 特別支援教育の専門性の向上と指導力の育成 (2) 学習指導要領に基づいた教育の実践 (3) 希望進路100%の実現 (4) 地域と歩む開かれた学校づくり (5) 命と人権を大切に作る安心・安全な学校づくり (6) 働き方改革の推進
------------	--

4 重点取組内容・成果指標	5 最終評価
---------------	--------

(1)共通評価項目								
重点取組				最終評価		学校関係者評価		
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	●児童生徒一人一人のニーズに応じた指導・支援による確かな学力の定着。 (○新学習指導要領を踏まえた教育の実践)	○段階や「育成すべき資質・能力」を踏まえた指導目標を立て、手立てを講じ、「付けたい力をつけることができた」と回答した教員80%達成。	・「個別の指導計画」の年間目標および各学期の目標設定にあたり学習指導要領の各教科の段階との照会に努め、日々の授業に臨む。 ・外部講師を招聘し、観点別学習評価について学ぶ機会を設定する。「生活」「職業・家庭」「職業」について、昨年度の評価が3観点で評価されているかをチェックし、学年やグループで観点別学習評価を取り入れた評価の在り方について検討を行う。	A	・先進校での取り組みを参考に、各観点に基づいた力を考えることができた。「個別の指導計画」の年間目標及び各学部の目標設定の整理をすることができた。 ・小学部では、対象児童の「生活」を3観点で評価する機会を設定したり、中学部、高等部においては、教科担当者で、3観点での評価の文言を検討したりした。その後の授業において3観点を意識した取り組みができるようになった。 ・学校評価アンケートでは、99%の学部、寄宿舎職員が「付けたい力をつけることができた」と回答した。	A	・先進校での取り組みを参考に3観点に基づいた指導内容や評価の文言などの検討をし99%の職員が「付けたい力をつけることができた」と回答しており良かった。 ・一人ひとりの課題を生活に照らして設定し、生活の中で繰り返していくことを地道に続けてほしい。	
	○「小・中・高12年間の一貫教育」の特長を生かす取り組みの推進 ○特別支援教育の専門性の向上	○小・中・高の各学年・コースで指導内容を見通すことができたと回答した教員80%達成。 ○職員・保護者への「うれしの特別支援学校スタンダード」の徹底80%以上。 ○授業づくりや、障害に応じた支援に関する研修の実施。	・縦割グループでの研修を通して、小学部の「生活」における「手伝い・仕事」と「役割」、中学部の「職業・家庭(職業分野)」、高等部の「職業」の各項目の関連性に着目し、キャリア発達視点からみた12年間の指導内容として、順序立てた学びになっているのかについて整理する。 ・授業づくりや、障害理解と支援に関する研修会を実施する。外部研修会や書籍の案内を行う。	A	・小学部の「生活」における「手伝い・仕事」と「役割」、中学部の「職業・家庭(職業分野)」、高等部の「職業」について、学習指導要領の内容一覧表を基に、取り組んでいる内容を書き出し、一覧表を作成したことで、12年間のつながりが具体的に見えてきた。また、その一覧表を参考に、中学部の「職業・家庭(職業分野)」、高等部の「職業」の次年度の年間指導計画を考えた。 ・障害に応じた支援に関する相談会を実施したり、教材・教具の紹介を行ったりした。外部研修会や書籍の案内を行い、オンライン研修を中心に複数の職員が参加した。	A	・12年間のつながりを大切に指導している所が良い。 ・卒業後の生活を見据えた取り組みこそが特別支援学校の特別支援学校たる所以だと思う。	
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○図書を活用した教育実践。 ○社会におけるルールやマナーに関する指導の充実。	・授業時間はもとより休み時間等を含めた学校生活全体を通しての活動において、社会性や道徳心の向上に資する支援・指導・働きかけを行う。	A	・学校評価アンケートでは、保護者職員共に90%以上の者が「豊かな心を身につける活動ができた」と回答した。引き続き、豊かな心を身につける教育活動を行っていく。	A	・社会のルールやマナー豊かな心は学校だけでなく家庭や地域の取組も必要だと思う。放課後デイサービスでの取組を学校と共有することも必要だと思う。	
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	●いじめ防止等(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等)について組織的対応ができていると回答した教員80%以上。	・いじめに関するアンケート調査を年5回実施する。 ・高等部生徒の相談体験活動として、年間を通して2回以上生徒と職員の面談の時間を設ける。	A	・年間で5件のいじめ認知を行ったが、年5回のいじめアンケートによって早期発見早期対応ができ、大きな事案に発展することがなかったと考えている。また、99%以上の教員が組織的対応ができていると回答した。 ・高等部生徒の相談体験活動として職員と生徒の面談が今年度も実施できた。職員と生徒が話しやすい雰囲気作りができたと思う。	A	・組織的な取組が中間評価の77%から99%に向上できている所は成果が出て良い。	
	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「学校職員は、子どものよいところを口頭や連絡帳などで保護者に伝えてくれていると思う」と回答した保護者70%以上。 ●「児童生徒が将来の夢や目標を持つように、一人一人の実態に応じた指導をしている」と回答した職員80%以上。	・児童生徒のよいところを褒めて、そのことを連絡帳などを通して保護者へ伝える。 ・児童生徒が自分で考えたり体験したりして、将来の生活を具体的にイメージする学習の充実。 ・児童生徒が自己の将来とのつながりに見通しをもったり、学習を振り返ったりするなど、授業改善を進める。	A	・99%の学部、寄宿舎職員が、口頭や連絡帳で児童生徒の良いところを褒めたり、保護者に伝えたりしている。と回答した。保護者に関しても97%の者が「そう思う」と答えるなど学校と家庭とが連携して、児童生徒が意欲的をもって教育活動に取り組むことができるような取り組みができた。	A	・中間評価で実態に応じた指導に対して、わからないの回答が7%あることが気になったが、その後、障害特性や必要な支援を学び改善されたのだと思う。先生方の努力の表れであろう。 ・取組自体が非常に困難な内容。平均的な数値ではなく、一人ひとりへのアプローチが大切だが、大いに難しい。	
	○希望進路の実現(進路開拓の取組)	○児童生徒、保護者の進路ニーズに応じた情報提供や就業・施設体験の設定を行い、「できている」「おおむねできている」と回答した教員95%以上。 ○希望進路達成率100%の実現。	・地域の企業や施設、関係機関と連携した研修、及び全学部における就業・施設体験の理解、体験先新規開拓。保護者の進路研修(外部講師)の実施。 ・生徒、保護者の進路ニーズに合った就業・施設体験の実施と事前・事後の進路学習の充実。 ・「つながり」「積み上げ」を意識した進路学習や進路相談	A	・新規企業開拓(11社訪問、進路除く)や校内留学(5日実施)等、学部を超えた進路支援の理解が継続できた。企業等における就労支援研修会(8社参加)を関係機関と主催し障害者の職場づくりを考えた。就業・施設体験の進路学習では、外部講師の招聘やうれ特就労フォーラム(110名参加)にて障害理解の啓発活動を推進した。中高合同作業授業ではつながりを意識した働く学びに取り組んだ。 ・高等部3年生は自ら選択決定した希望進路実現へ努力し達成する予定。保護者の協力をはじめ、事業所や関係機関との連携・協働が充実した結果である。	A	・進路の開拓は大変な取組だと思う。昨年4月に大幅な報酬改定があり、全国でA型、B型作業所の閉鎖が増えている。生徒の希望する進路先が安定した経営をしてくれることを切に願う。 ・進路部のみならず全職員、全校をあげての取組が不可欠。実習先開拓を行うことが不可欠である。	
	◎積極的に主体的な社会参加	○中学部・高等部の生徒たちの社会参加率90%以上。小学部の児童たちの参加率50%以上。	・学校間交流や地域の方々との体験交流活動を年5回以上実施。 ・部活動として障害者スポーツ大会、嬉野市文化祭への参加の他、アビリンピックへの出場や各種文化的行事や授業作品のコンクールへの出展の奨励。	A	・小中高においての学校間交流や高等部では地元五町田の音楽サークル「なんことや」さんとの交流会など地域社会と積極的なかわりが継続してできた。 ・年間を通じて多くの生徒や先生方が保護者協力のもと各競技の練習会や大会に参加している。また、全国障がい者スポーツ大会に向けて熱心に頑張っている。	A	・今年度は国スポ全障スポが佐賀県であり、子ども達の関心も高かったようだった。全障スポに参加した生徒の心身の成長を感じた。とても良い取り組みだと思う。 ・子どもに進めてほしい。「社会参加と自己決定」とあるように、まずは社会参加が必要。	
	●望ましい生活習慣の形成	○担任等が児童生徒の標準体重を意識した指導を計画できたと感じる職員が80%以上。 ○「運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることが好きですか」の質問に、「好き」「やや好き」と答える児童生徒70%以上をめざす。	・4月の身体測定結果から要注意者をまとめ、担任等へ周知、月1回程度の体重測定を実施する。 ・今年度佐賀県で開催される全国障害者スポーツ大会を見学する機会を設け、様々なスポーツに触れ、スポーツに対する関心を高める。	A	・要注意者の定期的な体重測定や、長期休業の前後で全員が体重測定を行うなど、児童生徒の標準体重を意識しながら指導を計画できていた。 ・10月26日(土)にSAGA2024全国障害者スポーツ大会(ポッチャ)の見学に行った。初めて観る児童・生徒も多かったようで、多くの児童・生徒が関心を示していた。下期のアンケートでは、ほとんどの生徒が体を動かすことが好きと回答し、上期と比べて3%上がっていた。	A	・発達に課題のある児童・生徒は偏食もあり肥満傾向の子がいるので、学校だけでなく家庭との連携も必要だと思う。保護者への働きかけを今後も力を入れてもらうと心強い。 ・全障スポが意欲・意識づけにつながった部分もあるのではないかとと思う。	
●地域支援	●効果的な地域支援に向けた特別支援学校のセンター的機能の充実	○県西南部地区の特別支援教育のセンターとしての役割を担い、積極的に相談事業を推進し、巡回相談及び来校相談においては依頼に対する実施率100%を目指す。 ○各学部・舎と連携し、地域の事例に役立てるために、様々なチーム支援の事例を6事例以上まとめる。 ○分掌部と連携し、地域に役立つ情報提供を行うなど、様々な形で地域支援に取り組む。(4回以上)	・地域支援リーフレット及び巡回相談の案内を発信する。 ・「特別支援教育コーディネーター地区別連絡協議会」や「地域連携研修会」を実施し、地域の学校等のコーディネーターやエリアリーダーとのネットワーク作り及び情報共有を行う。 ・相談支援部の分掌部会で「ケース会報告」の機会を設ける。 ・「各分掌部が持つ専門性とセンター的機能」を一覧にし、年度末に実績をまとめる。 ・学校ホームページに教材等に関する情報を紹介する。	A	・地域の学校等のコーディネーターや校区の市町教育委員会等を集めて5月の「連絡協議会」、11月の「地域連携研修会」を実施し、年間を通して「校内支援体制」について校種ごとに協議を重ね、地域の支援力向上を深めることができた。また、ニーズに応じて各分掌部と連携して、公開研修会実施や自立支援協議会、教育委員会、栄養士等から依頼の研修を実施するなど、巡回相談を含めて依頼に対して100%実施した。学校ホームページで教室環境づくりについての情報や研修会等の案内を発信し、巡回相談時に周知を行い、地域の学校等に活用してもらっている。	A	・巡回相談など依頼に対して100%実施できている所がすごいと思う。地域の学校の先生方も心強いと思う。 ・地域、幼・小・中学校への巡回相談は本当にありがたいことだと思う。今後も益々センター的機能の充実が図られるべきだと思う。	
	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・ひと月の時間外勤務45時間以内(または年間360時間)を職員一人一人が意識する。 ・管理職による出勤システムの確認と時間外在校時間の把握をこまめに行う。	A	・ひと月の時間外勤務45時間を超えた職員は、年度初めは20人以上と多かったが、後半は9月6人、10月4人、11月4人、12月2人であった。時間外勤務が多い職員が固定化してきており、そこを打破することが課題として残る。	A	・時間外業務が多い職員が固定化してきているとのことで、仕事の効率の問題か業務量の問題かわからないが、対応できると良いと思う。	

様式1(特別支援学校)									
●業務改善・教職員の働き方改革の推進		○「チームうれしの」を合言葉に一人一人の時間外勤務削減	○学部行事の進め方の工夫、情報共有の仕方の工夫、作成する資料の削減などに努める。 ○最大在勤時間11時間以内達成率が70%以上を目指す。	・各業務内容の効率化と平準化を図る。 ・会議時間の短縮及び必要に応じて書面開催への変更に取り組む。(資料の事前配布・終了目安時刻確認) ・毎週金曜日の定時退勤日の実施及び管理職面談による業務内容把握と改善。	A	・OneNoteを利用して情報共有を図り、情報アクセスを高めることができた。 ・学校行事の精選や早下校などに取り組み来年度の業務改善を行った。 ・金曜日の定時退勤日が学校として定着してきており、そのことで他の課業日も時間内に仕事を終えるよう仕事の工夫をする姿が見られるようになった。	A	・学校行事を見学し児童生徒も職員も生き生きとして良かった。行事の精選で業務の効率化に取り組むのは良いことだと思う。 ・取組達成 ・学校は、子ども達を帰した後に授業の準備などを行うので、企業等と違い、時間内で業務を終わらせることは非常に難しいと思うが、時間内に終わることができるような工夫を積極的にしていく必要がある。	
5 総合評価・次年度への展望		・保護者や職員のアンケートの数値を成果指標とした項目については、目標を達成できた。また、それ以外の項目についても当初計画していた取組内容をほぼ実施、達成できた。よって、最終結果ではすべての項目を「A」評価とした。 ・アンケートの結果から、学校の教育活動に対して保護者の理解と協力を得られていることがうかがえた。このことは、職員にとって大変心強く、感謝したい。一方「学力の向上」や「いじめの早期発見、早期対応に向けた取組」など保護者への説明が十分には伝えられていない、という反省が残った。次年度は、本校の具体的取組など機会を捉えて丁寧に説明していきたい。							